インド後期密教における‘死兆’の歴史的展開
—『チャトゥシュピータ・タントラ』から『ヴァジュラダーカ・タントラ』へ—

杉木恒彦

1. はじめに

インドの後期密教（＝仏教のタントラ）研究において、「死兆」はしばしば研究者の注目を浴びてきたトピックである。周知の通り、後期密教文献の文脈では、死兆は人生の危機としての死の時を予知しそれを避けるための実践である「死を欺くこと」(mṛtyuvañcana) を行うタイミングを把握するために、あるいは来世に理想的な境遇を得るために臨終時に行う実践であるウトクラーンティ・ヨーガ(utkrāntiyoga)のタイミングを把握するために説かれる。一般的にそれぞれの死兆には‘これこれの死兆が現れれば、余命○日’といったように、余命の規定がされている。したがって、死兆に関する知識を持っていれば、それが出現したときに死を避ける実践を行うことができ、また、死が避けられないと分かったときは、ウトクラーンティ・ヨーガを行うタイミングを知ることができるのである。

本稿では、『チャトゥシュピータ・タントラ』[1]と『ヴァジュラダーカ・タントラ』[2]が説く死兆について、それらの内容を比較・検討しつつ、前者から後者への展開を追求したい。本稿で論ずるように、それらの間には密接な関係が認められる。それらの比較検討を通して、インド後期密教における死兆観の歴史的展開の一例を明らかにしたい。

なお、筆者は別稿において、『チャトゥシュピータ・タントラ』の対応箇所を掲載した『ヴァジュラダーカ・タントラ』の死兆を含む章の校訂テキストの発表を近く予定している[3]。したがって、文献批判的な記述は別稿に譲り、本稿ではその主内容のみを検討するという形式をとることにする。

2. 『チャトゥシュピータ・タントラ』が説く死兆

『チャトゥシュピータ・タントラ』ātmapīṭha第2節に説かれる死兆の内容を箇

条書き形式でまとめれば、以下のようになる。（ブランケット内はBhavabhadraの注釈[4]による補充である。また、各項目に付した番号は、後の『ヴァジュラダーカ・タントラ』との比較のための便宜上のものである）

(0) 恐ろしいもの[やこと]を見[聞きし]なくても呼吸が切れ切れに震えたり[=異常に増減したり]、同様に頬がこけて[井戸の穴のような険しい]皺が現れると、6ヶ月で死ぬ。
(1) [鼻の脈管が切れて]鼻の肉が切れれば、7日で死ぬ。
(2) [眼の脈管が切れて]涙が途切れれば、5日で死ぬ。
(3) [頬の側面の脈管が切れて]頬の側面に長くけわしい皺が現れれば、1晩で死ぬ。
(4) [両耳の脈管が切れて]耳のくぼみが切れれば、5ガティ *(ghaṭi)* すなわち約2時間[5]で死ぬ。
(5) [舌の脈管が切れて]舌の線維が黒くなれば、2晩で死ぬ。
(6) [歯の隙間の脈管が切れて]上下の歯の隙間が密になれば、3夜で死ぬ。
(7) 首の側面の脈管が[切れて]外に浮き出れば、半月で死ぬ。
(8) [胸の籠の脈管が切れて]胸の籠がくぼめば、半月で死ぬ。
(9) [爪の脈管が切れて]身体の爪の血の気がなくなれば、8日で死ぬ。

『チャトゥシュピータ・タントラ』が説く死兆は、前節で述べた古典医学の死兆と基本的には同様の性質を持っていると考えられる。つまり、それらの徴候には、何か特定の原因があるわけではない。アーユルヴェーダ医学書の1つである『アシュターンガフリダヤ（Aṣṭāṅgahṛdaya）』[6]には、以下のように死兆が説明されている。

> *平時の外貌（rūpa）や、知覚器官（indriya）や、*声および言葉（svara）や、*離れて見て識別できる身体の形や色艶（chāyā）や、*日光により作られる身体の影や水面および鏡に映る身体の反射影像（praticchāyā）や、動作（kriyā）や、その他、さらに他の諸要素において、原因なく（animittataḥ）異常が生じること、それが死兆（riṣṭa）であると指示される。（Śarīrasthāna 5.4—5）[7]

オーソドックスなインド古典医学大系における死兆とは、たとえば病状の悪化や事故による怪我やストレスによる精神錯乱といった、医学的な根拠を説明できる徴候ではない。それは「原因なく」生じる異常、つまり医学的因果関係を

超えたものである。死兆が現れる原因を敢えて述べるとすれば、それは「死が迫りつつあること」としか言いようがない。話を『チャトゥシュピータ・タントラ』に戻せば、なるほど、注釈の見解を受けた場合、脈管が切れることが死兆の医学的根拠になるのではないか、という反論があるかもしれない。しかしその脈管が切れることに特定の原因があるわけではない。文献はそれを何も述べない。脈管が切れる原因を敢えて述べるとすれば、それは、「死が迫りつつあるから」としか言いようがないのである。

死兆が現れる身体の箇所は、身体の九穴（＝身体にある九つの穴：両眼・両鼻穴・両耳穴・口・性器の穴・肛門）のいずれかに関連するもの（：(0)(1)(2)(4)(5)(6)）、頬に関連するもの（：(0)(3)）、首に関連するもの（：(7)）、胸部に関連するもの（：(8)）、爪に関連するもの（(9)）に分けることができる。死兆の現れる箇所が基本的に上半身、それも首より上の箇所に集中していることが理解できよう。最後の爪に関連するもののみが、手だけでなく足の爪を考慮すれば下半身に現れる死兆ということになる。また、注釈の見解に従うならば、それらの死兆は各関連箇所に存する脈管が切れるという現象と結びついている。だが『チャトゥシュピータ・タントラ』自身がそのような考えを持っていたという明確な証拠はない。

なお、このような死兆のうち(1)〜(9)が現れた場合、死を避けるための2種類の方法（注釈：「死を欺くこと」(mṛtyuvañcana)）がタントラでは続いて説明される。ここではそれらのうち、本稿の論の展開上関連のある1つを箇条書き形式でまとめれば、以下のようになる[8]。各項目のブランケット内は、Bhavabhadraの注釈による補充である。

(1) Jñānaḍākinī 女神の種字 HŪṂを鼻に置き[、それにより切れた脈管を塞ぎ、種字が Jñānaḍākinī 女神になると観想する]。
(2) Vajrī (or Vajraḍākinī) 女神の種字SUṂを眼に置き[、それにより切れた脈管を塞ぎ、種字が Vajrī (or Vajraḍākinī)女神になると観想する]。
(3) Ghorī (or Ghoraḍākinī)女神の種字KṢUṂを頬に置き[、それにより切れた脈管を塞ぎ、種字がGhorī (or Ghoraḍākinī)女神になると観想する]。
(4) Vetālī女神の種字YUṂを耳に置き[、それにより切れた脈管を塞ぎ、種字がVetālī女神になると観想する]。
(5) Caṇḍālī 女神の種字 HŪṂを舌に置き[、それにより切れた脈管を塞ぎ、種字がCaṇḍālī女神になると観想する]。
(6) Siṅghī (or Siṅghinī)女神の種字 SMRYUṂ を歯の隙間に置き[、それによ

り切れた脈管を塞ぎ、種字が Siṅghī (or Siṅghinī)女神になると観想する]。

(7) Vyāghrī女神の種字 KMRYUṂを首の側面に置き[、それにより切れた脈管を塞ぎ、種字がVyāghrī 女神になると観想する]。

(8) Jambukī女神の種字YMRYUṂを胸に置き[、それにより切れた脈管を塞ぎ、種字がJambukī女神になると観想する]。

(9) Lūkī (or Ulūkī) 女神の種字 KṢMRYUṂ を爪に置き[、それにより切れた脈管を塞ぎ、種字がLūkī (or Ulūkī)女神になると観想する]。

これらの方法は、死兆が現れた箇所に特定の女神の種字 (bīja)を瞑想することにより、死兆を消そうとするものだと考えられる。（なお、上記の女神たちのグループは、治癒や延命の効果をもたらす女神たちとして後期密教にしばしば登場する。）先に述べたように、注釈は死兆の出現と身体の関連箇所の脈管の切断を関連づけていた。したがって、注釈はここでも脈管と関連づけようとする。つまり、死兆が現れる身体の箇所に女神の種字を置くことにより、切れた脈管を塞ぎ、それによって死兆を消すのである。『チャトゥシュピータ・タントラ』自身がここで脈管を意図していたという明確な記述は見られないが、この、切れた脈管を塞ぐという行為は、後に重要になってくる。

3.『ヴァジュラダーカ・タントラ』の説く死兆

次に、『ヴァジュラダーカ・タントラ』第20章が説く死兆の内容を検討した後、先の『チャトゥシュピータ・タントラ』のものと比較してみたい。

> 次に、世尊に対して女神たちは供養し敬礼し、以下のように語った。「世尊よ！　特に智慧の真実を私は拝聴したいのです。身体のこの徴はどのようなものですか。[それは]もろもろの脈管にどのように依拠しているのですか。それらの種類を私は知りません。最も優れた楽であるあなたはお説きください。」
> 「聞け、女神マハーマーヤーよ！　すべての幻が変化した女よ！　それら[もろもろの脈管]の中では、32本の偉大なる脈管が最も卓越し優れている。同様に、女神よ！　12 [の母音]がある。[それら12の]母音には、[脈管の中を]行くという特徴がある。白と黒の区別によって、[それら母音は(12×2＝)]24であると言われる。」[9)]

上の引用文は、『ヴァジュラダーカ・タントラ』第20章が死兆を説くにあたって記す、世尊とその妃マハーマーヤーの対話である。『チャトゥシュピータ・タントラ』も死兆を説く際に類似文章を述べるのだが、『ヴァジュラダーカ・タントラ』で「[身体に現れる徴は]脈管にどのように依拠しているのですか」となっているところを、『チャトゥシュピータ・タントラ』では「[身体に現れる徴は]真実にどのように依拠しているのですか」としている[10)]。『ヴァジュラダーカ・タントラ』は死兆を脈管と積極的に関連させてとらえようとしていることが理解できよう。

タントラ本文では続いて死兆が具体的に説かれる。該当箇所をすべて引用するとかなり長くなるため、ここでは本文に記される順序に従って、各項目の要点のみを箇条書きでまとめてみたい。なお、各項目のブランケット内は、Bhavavajraの注釈[11)]により補った部分である。また、各項目の「上を向き」という表現はすべて女性形単数(ūrdhvamukhī)であり、そして以下に記す項目(11)においてそれは脈管(nāḍī)であることが明記されており、さらに前段落で述べたことを考え合わせれば、以下の各項目の「上を向き」は脈管を指していると考えることができる。

(0)　8日間、呼吸が切れ切れに震える[=異常に増減する]と、2年4ヶ月24日で死ぬ。
(0-1)　6日間 → 2年6ヶ月18日で死ぬ。
(0-2)　7日間 → 2年6ヶ月10日で死ぬ。
(0-3)　8日間 → 2年4ヶ月24日で死ぬ。
(0-4)　9日間 → 2年4ヶ月12日で死ぬ。
(0-5)　11日間 →1年9ヶ月18日で死ぬ。
(0-6)　12日間 →1年7ヶ月6日で死ぬ。
(0-7)　13日間 →1年4ヶ月9日で死ぬ。
(0-8)　14日間 →1年2ヶ月5日で死ぬ。
(0-9)　15日間 →1年で死ぬ。
(0-10) 16日間 →10ヶ月24日で死ぬ。
(0-11) 17日間 →9ヶ月18日で死ぬ。
(0-12) 18日間 →8ヶ月12日で死ぬ。
(0-13) 19日間 →7ヶ月6日で死ぬ。
(0-14) 20日間 →6ヶ月で死ぬ。
(0-15) 21日間 →5ヶ月12日で死ぬ。
(0-16) 22日間 →4ヶ月24日で死ぬ。

(0-17) 23日間 →4ヶ月6日で死ぬ。
(0-18) 24日間 →3ヶ月11日で死ぬ。
(0-19) 25日間 →3ヶ月で死ぬ。

(1) [鼻の両穴の境目の肉の中にある脈管が切れて]鼻の肉が切れたとき、[脈管は上を向き、鼻は曲がり、]7日で死ぬ。
(2) [眼にある脈管が切れたとき、脈管は]上を向き、涙が止まり[眼が乾燥し]、5日で死ぬ。
(3) [左耳の下の]頬の側面[の先端の脈管が切れたとき]、[脈管は]上を向き、[頬のつなぎ目が開いて皺がくっきりし、]1日で死ぬ。
(4) 右耳[の下の頬の側面の先端の脈管が切れたとき]、[脈管は]上を向き、[頬のつなぎ目が開いて皺がくっきりし、]18日で死ぬ。
(5) [舌の先端部分の上側の脈管が切れたとき、]舌の[先端部分の上側の]線が黒くなり、6日で死ぬ。
(6) [歯の隙間の脈管(＝四元素の通り道)が切れたとき、脈管は]上を向き、[上下の]歯の隙間が密になって[開かなくなり]、6日で死ぬ。
(7) 首の側面にある表面側の脈管[が切れたとき]、上を向き、[気息がそこに集まり、]5日で死ぬ。
(8) [胸の籠の脈管が切れたとき、脈管は]上を向き、胸の籠はへこみ、半月で死ぬ。
(9) 臍の中央[の脈管が切れることにより風が行かなくなり]、爪から血の気が失せたとき、10日で死ぬ。
(10) 腿の上方[の脈管が切れたとき]、[風が]上へ行き、[動きが容易でなくなり、]24日で死ぬ。
(11) 脹脛の脈管[が切れたとき、脈管は]上を向き、[脹脛が険しくなり、]12日で死ぬ。
(12) 性器[にある脈管が切れたとき、脈管は]上を向き、[性器の梵紐が見えなくなり、]即死する。
(13) 生殖器[にある脈管が切れたとき、脈管は]上を向き、6日で死ぬ。

内容を見れば理解できる通り、これらの死兆は先に述べた『チャトゥシュピータ・タントラ』の説を継承しつつ、変更・増加させたものである（各項目の冒頭に付した番号は、先の『チャトゥシュピータ・タントラ』の死兆の各項目に付した番号に対応している）。死兆に関して、『チャトゥシュピータ・タン

トラ』と『ヴァジュラダーカ・タントラ』の間には、前者から後者への影響関係を推定することができよう。

死兆の現れる箇所は、身体の九穴（＝身体にある九つの穴：両眼・両鼻穴・両耳穴・口・性器の穴・肛門）のいずれかに関連するもの（：(0)(1)(2)(4)(5)(6)(12)(13)）、頬に関連するもの（：(3)）、首に関連するもの（：(7)）、胸部に関連するもの（：(8)）、爪に関連するもの（(9)）、足に関連するもの((10)(11))に分けることができる。特に記すべき『チャトゥシュピータ・タントラ』との相違点は、身体の九穴に関連するものとして性器に関連する(12)と(13)が新たに加えられたこと、足に関連する(10)と(11)が加えられたこと、さらに(9)が述べる爪の血色の異常が、臍の箇所での異常と結びつけられていることが挙げられる。要するに、『チャトゥシュピータ・タントラ』と比較した場合、『ヴァジュラダーカ・タントラ』は下半身に現れる死兆を項目の中に加えたと言うことができる。

他に注目すべき相違点としては、呼吸が途切れ途切れに震える[= 呼吸が異様な増減を見せる]という死兆に関して、『チャトゥシュピータ・タントラ』と異なり、『ヴァジュラダーカ・タントラ』では呼吸異常の期間が規定され、さらにその期間の相違により様々な異なった寿命を示すとしている点である。呼吸異常の期間が長くなればなるほど寿命は少なくなるとしているのだが、この数字設定を見るかぎり、『ヴァジュラダーカ・タントラ』は死兆としての呼吸異常に関して余命3年から計算をしていることが推測される。このことは、上記の死兆のリストの(0—1)を説明する際の記述からも理解できる。（ブランケット内は注釈による補充だが、その補充は同タントラの同章の他の部分からも支持され得る）

> 愛らしい女よ！　基準となる日数の合計がある。時間を自体とする輪がある。排出のために整えられた1つ[の門](=右の門：右鼻穴)に、6日間、[気息が誤って途切れ途切れに]運ばれたとき、360日から成る1年を3倍してから、まさしく割り当て分としての基準を、私は簡潔に説こう。[すなわち、6日間気息が誤って運ばれるとき、] 2年6ヶ月18日が[残りの寿命の]長さであると言われる[12]。

「時間を自体とする輪」とは、本タントラ第10章に説かれる＜時間の輪＞を指す。この＜時間の輪＞は、暦を作成する際の基盤にもなる。これについては既に別項でアウトラインを述べているのでここでは省略したいが[13]、この時間

のサイクルに基づいて余命の長さの計算が3年から計算される。つまり、『ヴァジュラダーカ・タントラ』に至ると、死兆の出現による余命の計算と暦学が結びつくのである。なお、余命計算を3年から始めるという方法は、『ヴァジュラダーカ・タントラ』より後に作成されたと考えられる『カーラチャクラ・タントラ』にも見られる[14]。

また、他に注目すべき相違点は、死兆と脈管の関連である。『チャトゥシュピータ・タントラ』自身は、死兆と脈管の関連を明確に説いてはいなかった。だが『ヴァジュラダーカ・タントラ』は、死兆の出現と、死兆が現れる身体の箇所を通る脈管が上を向くことを関連づけていた。注釈によれば、脈管が上を向くことは、その脈管が切れたことによる。時代が下るに従って死兆と脈管の異常の関連が意識されるようになったことが理解できよう。死兆と脈管の異常の関連という発想は、後代の『カーラチャクラ・タントラ』にも確認できる。

4. おわりに

本稿では『チャトゥシュピータ・タントラ』から『ヴァジュラダーカ・タントラ』に至る、死兆の見解の詳細について検討してきた。その結果、『チャトゥシュピータ・タントラ』から『ヴァジュラダーカ・タントラ』への強い影響関係、および前者から後者への展開の様子を概観することができた。その展開の中で、死兆が暦学や脈管学と結びついてゆくのである。

最後に、一つ付け加えておくべきことは、密教者にとっての死兆は、古典医学の医師たちにとってのそれとは意義が異なるという点である。死兆が現れた患者に対して、医師がすべき決断は以下のようなものでなる。

> 「生命の尽きた者(=死兆が現れた、瀕死の者)に対してなされる治療行為は徒労(vyartha)である。[それは]卑しい者に対する行為のようなものである。[そのようなことをしたら、]彼は不名誉となり、身体が不確実となり(dehasaṃdeha)、自分の利益を損なうことになる。そこで今、生命の尽きた者たちの特徴を、[Ātreyaは]説く。賢者たちは、平時体調の異常化を、死兆の名で呼んだ。」(Śarīrasthāna 5.2—3)
>
> 「医者は、たとえ問われても、生命が尽きた者[= 死兆が現れている者]の親族や友人たちに対して[その患者の]死を宣告してはならない。そして[医師は]、彼の治療を望んではいけない。瀕死の者は、医薬の諸効力を無に帰すヤマの使者たちやピシャーチャたちなどに取り囲まれるので、[医

師は]彼を見捨てるべきである。」（Śarīrasthāna 5.129—130）

引用文から明らかに理解できることは、医師は死兆の現れた者に対する治療を放棄しなくてはいけないということである。「ヤマの使者たちやピシャーチャたち」といった死にまつわるデーモンたちに「取り囲まれる」という表現が、死兆の切り開く領域が生者の領域とは（すくなくとも医師の職業という点から見れば）本質的に次元の異なる領域であることを象徴的に表わしていることに注意しなければならない。つまり、「ヤマの死者たちやピシャーチャたち」は「医薬の諸効力を無に帰す」とされているように、死兆の切り開く領域は医学的な治癒の論理、すなわち医学的因果律が及ばない領域と把握される。医師は医学のプロフェッショナルである。彼は医学的因果律が及ぶ領域においてのみ能力を発揮し得る。したがって、医学的因果関係を超えたところにある死兆に対する処置は、医師の能力が及ばないがゆえに、医師という職業に携わる者の管轄外にあるものとして合理化されるのである。ゆえに、死兆が現れた者に対する治療行為は医師にとってはまさしく「徒労」なのである。死兆が現れた者を（厳密には彼はまだ生きているにも関わらず）「生命の尽きた者」という、死者と同義の表現で表わしていることも、この点から説明できよう。彼はもはや医学的因果律が及ばない領域の住人になりつつある者であり、したがって医師という立場から見れば、死者とほぼ同義なのである。

このように、インドの古典医学の伝統においては、死兆は医学的因果律の及ばない出来事であり、ゆえに医師の能力の及ばないものとされている。つまり、医師にとっては、死兆の出現は「治療の終わり」を告げる契機であるのに対して、密教者にとっては、死兆の出現は「死を欺く」実践や「ウトクラーンティヨーガ」の実践の「開始」を告げる契機となっているのである。ここに、死兆の出現という事態に関する、世俗人としての古典医学の医師と脱俗人としての宗教家の分業の一例を見ることができよう。医学的因果律の及ばない死兆の領域において、密教者はその能力を発揮するとされるのである。死兆は医学界にも宗教界にも共有された発想ではあるが、世俗人たる古典医学の医師と脱俗人たる密教者の間には、死兆の持つ意義はその方向性が相違しているのである。

(注)

1) Skt Ms. Cambridge 1704(12), Kathumandu Moriguchi 155.

2) Skt Ms. Calcutta Śāstrī72, Tokyo Matsunami 343.

3) 『智山学報』53, 2004年に予定。

4) Catuṣpīṭhanibandha. Skt Ms. Tohoku IASWR MBB-I-43, Tib. Ota 2478.

5) ghaṭiという時間の単位については、拙稿 "Astrology in Mother-Tantric Literature" 『印度学仏教学研究』51—2, p.(23)—(26)、2003年を参照せよ。

6) *Vāgbhata's Aṣṭāṅgahṛdaya — Text, English Translation, Notes, Appendix and Indices*, by K.R.Srikantha Murthy, 1996, Vanarasi.

7) rūpendriyasvaracchāyāpraticchāyākriyādiṣu / anyeṣv api ca bhāveṣu prākṛteṣv animittataḥ/ vikṛtir vā samāsena riṣṭaṃ tad iti lakṣayet //

8) ここで紹介しなかったもう一つの方法を、簡潔に紹介しておきたい。それはヤントラ（yantra：瞑想のための補助的器具）を作成し、それに基づく宗教的実践を行うことである。

最初に、行者は焼かれていない2つの器に、以下のようにマントラの輪をゴーローチャナあるいはクンクマあるいはそれらの混合物で描く。2つの器のうち、下に配置される器についてまず述べたい。以下に記すそれぞれのマントラは、それぞれの方位に位置する女神たちを表わしている。これらの女神たちは、先の「死を欺く」方法に登場した女神たちである。

(下の器)

	(女神)	(マントラ)
中央	：	：oṃ ＋ 対象者の名前 ＋ rakṣa×2 hūṃ svāhā
東	：Vajrī	：oṃ ＋ 対象者の名前 ＋ rakṣa×2 suṃ hūṃ svāhā
北	：Ghorī	：oṃ ＋ 対象者の名前 ＋ rakṣa×2 kṣuṃ hūṃ svāhā
西	：Vetālī	：oṃ ＋ 対象者の名前 ＋ rakṣa×2 yuṃ hūṃ svāhā
南	：Caṇḍālī	：oṃ ＋ 対象者の名前 ＋ rakṣa×2 hūṃ hūṃ svāhā
北東	：Siṅghī	：oṃ ＋ 対象者の名前 ＋ rakṣa×2 smryuṃ hūṃ svāhā
東南	：Vyāghrī	：oṃ ＋ 対象者の名前 ＋ rakṣa×2 kmryuṃ hūṃ svāhā
南西	：Jambukī	：oṃ ＋ 対象者の名前 ＋ rakṣa×2 ymryuṃ hūṃ svāhā
西北	：Lūkī	：oṃ ＋ 対象者の名前 ＋ rakṣa×2 kṣmryuṃ hūṃ svāhā

それぞれのマントラには、それらに対応する女神たちの種字（この種字は、先に紹介した1つ目の「死を欺く」方法で重要な役割を果たしていた）を含んでいる。また、それぞれのマントラの最後のhūṃ字には、仏たちの中でも最重要

な5人の仏たちが刻印されている。すなわち、hūṃ字の中のアヌスヴァーラの部分は毘盧遮那如来であり、半月の部分は不空成就如来であり、ūの部分はアシュク如来であり、haの下の部分は無量光如来であり、haの上の部分は宝生如来である。さらに、それぞれのマントラには、「守り給え 守り給え（rakṣa×2）」の語が含まれている。これは、瀕死者の守護を、五仏が刻印されたマントラによって女神たちに懇願するあるいは女神たちの力により行うということを意味するのであろう。その女神たちには死兆を消す働きがあることは、すでに見た通りである。

次に、2つの器のうち、上に配置される器について述べたい。その器には以下のようなマントラが描かれる。

（上の器）

中央	：	：oṃ + 対象者の名前 + rakṣa×2 hūṃ svāhā
東	：Ḍākinī	：ṛ
北	：Dīpinī	：ṝ
西	：Cūṣiṇī	：ḷ
南	：Kaṃbojī	：ḹ
北東		：i ī
東南		：u ū
南西		：e ai
西北		：o au

下の器と共通している点は、中央に位置するマントラが同じであることである。その他の点は大きく相違し、A Ā AṂ AḤ を除く12の母音が記される。さらに四方に位置するそれらの母音が表わす女神は、先の下の器に登場した女神たちとは異なる4人の女神たちである。

以上のような2つの器が用意できたら、次に行者はそれらを赤い糸で合わせ、全体を赤白檀で塗る。これによって「死を欺く」ためのヤントラが完成する。その後、さまざまな花や焼香や香や供物でそのヤントラを供養する。そのヤントラは、死兆を消す能力のある女神たちのヤントラだからである。

続いて行者は女神たちと一体化する観想を行い、「自分はVajrasattvaである」という強い自負を持つ。これは密教に特徴的な「尊格とのヨーガ(devatāyoga)」である。密教の様々な実践は、行者と尊格が一体化したところから本格的に始まる。行者自身が尊格と等しい存在となって、尊格の持つ能力のままに、様々な行為を成し遂げるのである。そして、行者は手に金剛杵を持って、先のヤン

トラに触れ、“oṃ+ 対象者の名前 + rakṣa×2 hūṃ svāhā”と108回唱える。このマントラは、ヤントラの2つの器のそれぞれ中央に描かれたマントラと同じであり、対象者を「守り給え 守り給え」という内容になっている。以上の実践により、対象者の前世の罪を神々が包囲し、対象者は身体中の痛みから解放され、つねに健康となり、不慮の死に見舞われずに済むという効果を得られる。寿命が尽きようとしている者でも6ヶ月寿命を延期できるという。

9) atha bhagavān[→-vato] devī pūjāṃ kṛtvā praṇipratyaivam āhuḥ[→āha] — bhagavān[→-van] śrotum icchāmi jñānatattvaṃ viśeṣataḥ / kathaṃ cihnam idam aṅge kathaṃ nāḍīsamāśritam // bhedaṃ teṣāṃ na jānāmi kathayasva mahāsukham / śṛṇu devi mahāmāyā sarvamāyāvikuruvite // dvātriṃśatimahānāḍī teṣāṃ śreṣṭhatamā parā / daśa dve tu tathā devi svarāṇāṃ gatilakṣaṇam // sitakṛṣṇavibhāgena caturviṃśatir udāhṛtāḥ / なお、テキストクリティークの詳細は別稿にゆずる。

10) bhagavan śrotum icchāmi jñānatattvaṃ viśeṣataḥ — kathaṃ cihnam idam aṅge kathaṃ tattvādim āśritam[→tattvaṃ samāśritam] //śṛṇu vajra mahārāja aṅgacihnādi darśitam / yena vijñātamātreṇa mṛtyukālam iva sthitam //「世尊よ！智慧の真実を私は特に拝聴したいのです。身体におけるこの徴はどのようなものですか。[それは]どのように真実に依拠しているのですか。— 聞け、金剛よ！大王よ！ 身体の徴が説かれている。それを知るだけで、死の時が確定する。」なお、テキストクリティークの詳細は別稿にゆずる。

11) Śrīvajraḍākamahātantrarājasya vivṛti. Tib. Ota 2131.（サンスクリット語写本は現存しない）。

12) pramāṇadinasaṃkhyāni cakraṃ kālātmikaṃ priye / ṣaḍ dināni yadā vyūḍam ekoccāraṇaśobhite // varṣaṃ tatra trayaṃ guṇya triśataṃ ṣaṣṭikaṃ tathā / bhāgam eva pramāṇaṃ tu kathayāmi samāsataḥ // varṣadvayaṃ samuddiṣṭaṃ māsāś ca ṛtusaṃkhyayā/ なお、テキストクリティークの詳細は、別稿にゆずる。

13) 拙稿 “Astrology in Mother-Tantric Literature” 『印度学仏教学研究』51-2, p.(23)–(26), 2003年。

14) *Vimalaprabhāṭīkā of Kalki Śrīpuṇḍarīka on Śrīlaghukālacakratantrarāja by Śrīmañjuśrīyaśa,* vol.1, by Jagannatha Upadhyaya, 1986, Varanasi, p.121.

（すぎき・つねひこ　研究拠点形成特任研究員　武蔵野大学非常勤講師）

On the Historical Development of "Death-signals" in Late Indian Buddhist Tantrism
: From the Catuṣpīṭhatantra to the Vajraḍākatantra

Tsunehiko Sugiki

It is important for practitioners of late Buddhist Tantrism to know their moments of death, for by this knowledge they can start practices to avoid the death or, when the death turns out to be unavoidable, they can prepare for the practice called utkrānti-yoga, the meditation at one's dying moment to obtain a better mode of existence in the next life. Death-signals (precautionary signals of one's death) are among the methods for knowing one's moment of death. This paper aims to analyze the historical development of this system from the Catuṣpīṭhatantra to the Vajraḍākatantra.

The system introduced in the Catuṣpīṭhatantra had a strong influence on the making of the system in the Vajraḍākatantra. From the former to the latter, however, three changes can be observed as follows:

(i) In the former, death-signals appear on the upper half of the body, while the latter insists that they should appear also on the lower half.

(ii) In the latter, the rest of one's life-span is computed on the basis of the system of "circulation of time". The system of death-signals is based on that of calendar.

(iii) In the latter, arising of the death-signals is connected with abnormality of bodily vessels (vessel-like organs including blood vessels). It can be stated that the system of death-signals encounters that of vessels.